

日向・延岡新産都市計画道路西階通り線(市道)  
改良工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

の　た　　ち　　う　　は　　つ　　た　　い　　せ　　き  
**野田町八田遺跡**

1978・3  
延岡市教育委員会

## 序　　言

文化をひと口で言うなら、それは人間活動の所産のすべてであるということです。

わたしたちはたえず新しい文化創造を指向しています。新しい文化と言ってもそれは現在を基点としたものであることは言うまでもありませんが、又現在は過去の延長線上にあるものであるということもたしかなことあります。

郷土を伸ばす運動は、すぐれた郷土愛の精神の高揚にこそ期待されるのですが、そのことは当然過去の文化遺産の愛護の精神にもつながっていくべきものであります。

最近の世相からして、やゝもすれば、埋もれた貴重な文化財がほうむり去られがちであって大変残念なことだと思っています。

ここにまとめられた「野田町八田遺跡」は、そういう意味ではまことに貴重な報告書であると言つてよいでしょう。

調査員の方々には、調査及び原稿執筆にあたりまして、ご多忙中にもかかわりませざご苦労いたしましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

この報告書が、文化財愛護思想の高揚のためにご活用いただければ幸いに存じます。

昭和53年3月

延岡市教育委員会  
教育長　長谷川　時　丸

## 例　　言

1. 本書は、延岡市都市計画課の都市計画道路西階通線建設に伴なう事前緊急調査として、延岡市教育委員会が実施した野田町八田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は昭和52年11月15日から12月4日、12月19日から22日までの延べ25日間実施した。
3. 発掘調査は延岡市教育委員会が計画し、社会教育課主事牧野義英が現場を担当した。発掘調査には、日高正晴、田ノ上哲、北郷泰道があたり、資料整理、挿図作成、写真撮影も3人が分担して行なった。編集には県教育委員会文化課主事岩永哲夫が協力した。
4. 本文の執筆者の氏名は各文末に示した。
5. 炭化材の鑑定は宮崎大学農学部森林利用学教室の大塚誠講師に依頼した。

## 本文目次

序 章	
I. 発掘調査の契機と概況	6
II. 遺跡の歴史的環境	6
第1章	
I. 遺 構	11
1. 住居跡	11
2. 土器集積塗	11
3. ピット群と溝状遺構	11
II. 出土遺物	16
1. 弥生式土器	16
2. 繩文式土器	19
3. 石 器	24
4. 住居跡木材炭化物	28
第2章	
結 語	33

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡所在地	8
第2図	八田遺跡周辺地形図	9
第3図	八田遺跡平面図	10
第4図	A、C地区造構実測図	12
第5図	住居跡実測図	13
第6図	土器集積塗実測図	14
第7図	C地区第2トレンチ東壁土層図	15
第8図	弥生式土器実測図1)	20
第9図	弥生式土器実測図2)	21
第10図	弥生式土器実測図3)	22
第11図	縄文式土器実測図	23
第12図	石器実測図(1)	26
第13図	石器実測図(2)	27

## 図版目次

図版 1	遺跡遠景・調査前の状態	35
図版 2	C 地区の調査状況・住居跡炉上部の壺形土器	36
図版 3	住居跡・溝状造構	37
図版 4	住居跡出土の櫛目文土器・孔のある炭化木材	38
図版 5	C 地区土器集積場	39
図版 6	C 地区第 2 トレンチ東壁土層・土器集積場	40
図版 7	櫛目文土器・壺形土器・小型土器	41
図版 8	出土土器	42
図版 9	出土土器底部	43
図版 10	底部・高杯脚部・土鍤	44
図版 11	出土縄文式土器	45
図版 12	石庵丁・石鍤・石鎌	46
図版 13	石斧	47

## 序 章

### I. 発掘調査の契機と概況

延岡市南方地区の西階町から野田町へ通ずる西階通線が野田台地に設定され、都市計画街路事業として延岡市当局に買収された。この計画は昭和53年度から道路工事に着手する予定になっているので52年度中に、その予定線上の遺跡確認を行い、もし、遺跡が存在する場合は発掘調査を行わねばならないことになっている。この路線上では野田町八田地区に弥生式土器片が散布していることが明らかになった。それで、昭和52年7月下旬に県文化財審議会委員の日高正晴と県教育委員会文化課主事岩永哲夫、それに延岡市教育委員会関係者で試掘調査を行ったところ、弥生式遺跡であることが明白になった。そこで、この道路工事に着手する前の事前調査として市教育委員会の主催により昭和52年11月15日から同12月4日まで発掘調査を実施した。調査結果はその発掘調査期間の前半において弥生式土器片がかなり分布する弥生式後期の遺跡を確認することができ、また、その地区には多くの柱穴も発見されたが、その柱穴の配列が整っていないので、それらを住居跡との関連でどのように結びつければよいか十分に解明することができない。後半では、この遺跡の北西部にかなり整然とした住居跡の遺跡を発見することができた。この住居跡は内部に4ヶ所の柱穴が認められ、さらに、その周囲には、これを取りまくように柱穴が設けられていた。しかし、この調査期間の最終日において住居跡の発掘調査が茶園畑でできなくなり、その中途にて中止するの止むなきに至った。その後、市都市計画課の交渉により茶園が除去されることになり発掘調査が可能になつたので再度、12月19日から22日まで、残された住居跡の調査を続行することにした。そして、その結果、やや方形を呈する住居跡を確認することができた。なお、この発掘に關係した調査員は下記の通りである。

調査員　日高正晴（県文化財審議会委員）  
　　田ノ上　哲（宮崎考古学会員）  
　　北郷泰道（宮崎考古学会員）

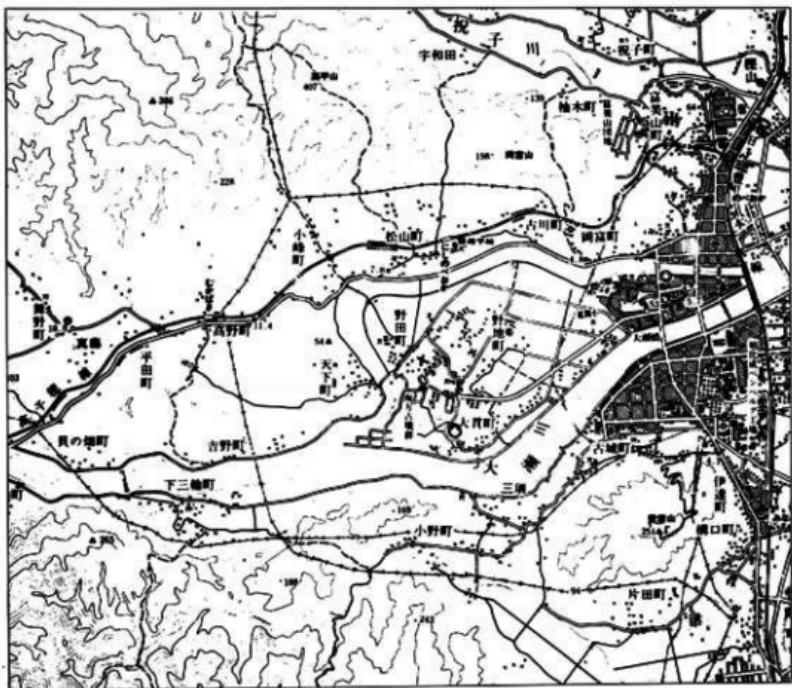
（日高正晴）

### II. 遺跡の歴史的環境

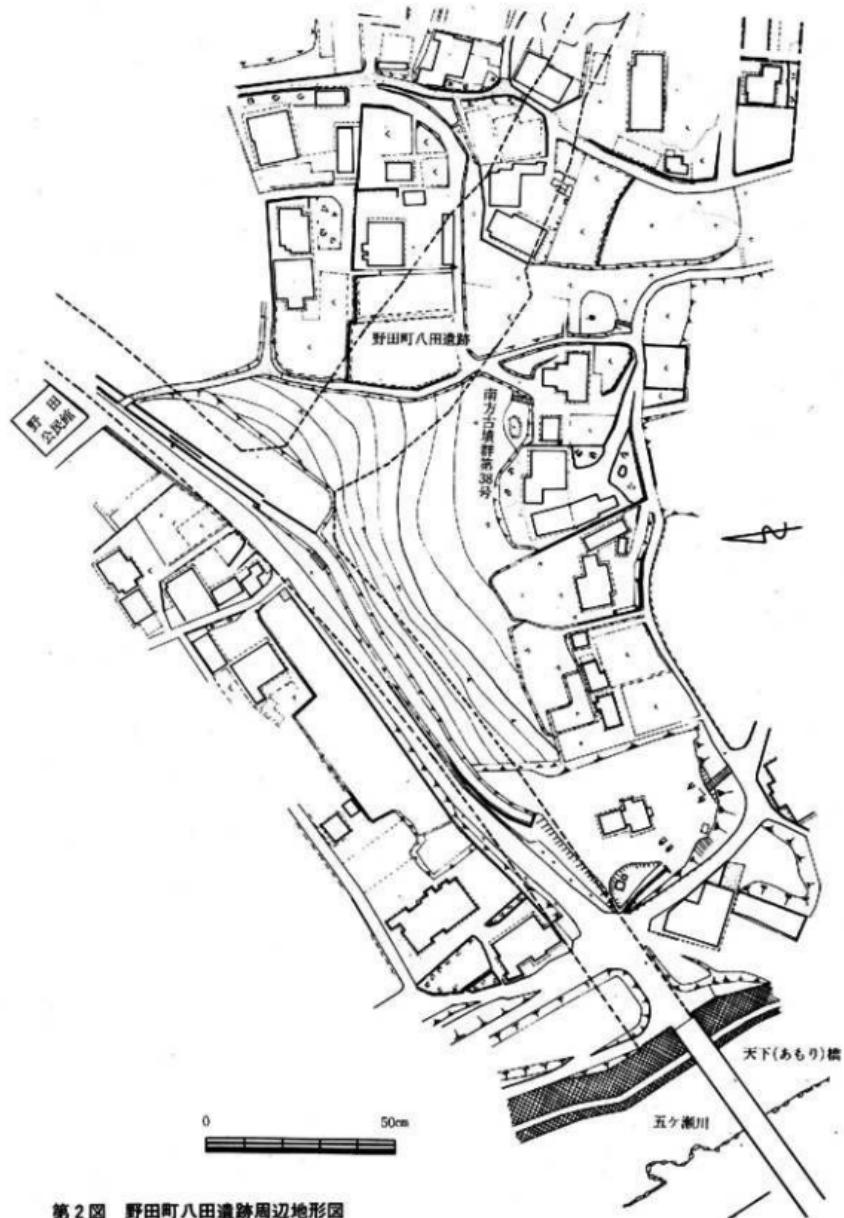
野田町八田遺跡は五ヶ瀬川が大瀬川を分岐して北流する湾曲部のすぐ右岸丘陵台地（標高約20m）にある。この丘陵地一帯は五ヶ瀬川と大瀬川に囲まれており、さらに、その両河川は延岡市街地を抜きながら合流して、東の方口向灘に注いでいる。また、この遺跡のある台地からすぐ北側は沖積層の低い田園が広がっているが、遠くには五ヶ瀬川の堤防が眺望できる。この野山、野地、大貫それに西方の五ヶ瀬川を越した地域には、約40基の古墳が散在する国指定史跡南方古墳群地帯である。このほか延岡市内には稻葉崎地区、樫山地区、小野地区および三須地区などに古墳が点在しており延岡市内全地域では80数基を数えることができる。この南方古墳群中にはこの地域では古い2基の柄鏡式古墳が存在する。1基は天下の吉野神社北方丘陵上に築造されており、大正2年3月、鳥居

龍造博士の発掘調査により長さ 4.24 m の舟形粘土棺が発見された。他の一基はその南側の丘陵上に相対して位置し、その古墳の後円部埴丘上に吉野神社の社殿が建てられている。この両柄鏡式古墳は前方後円墳の編年上、古い形式に属するもので、県北における最古の古式古墳として注目されるところである。また、この野田の遺跡から東南の方へ少し行った所に大きな剣抜の長持型石棺が露出している。蓋には縄掛け突起もつくりられており、延岡地方では最大の石棺である。なお、この遺跡のすぐ西側には38号の円形墳も存在する。ところで大貫には古くから知られている縄文時代の貝塚が存在し、これまで発掘調査も実施されたが、県内には貝塚が極めて数少い中にあって、代表的な遺跡である。このように、この野田町八田遺跡の周辺には主として古墳時代関係の遺跡が數多くみられるのであるが、従来、弥生式遺跡として、この付近で確認されたものは貝の畠弥生式遺跡をあげることができる。この遺跡は野田の遙か西方、日之影線に沿った下舞野近くにあり、昭和41年3月、県教育委員会主催により弥生式遺跡の発掘調査が行われ、その結果、住居跡なども発見された。また、大瀬川の右岸にあたる恒富町本村では昭和14年頃、弥生式時代の遺物包含層が認められ、さらに、昭和25年12月には早稲田大学を中心とした発掘調査も実施された。

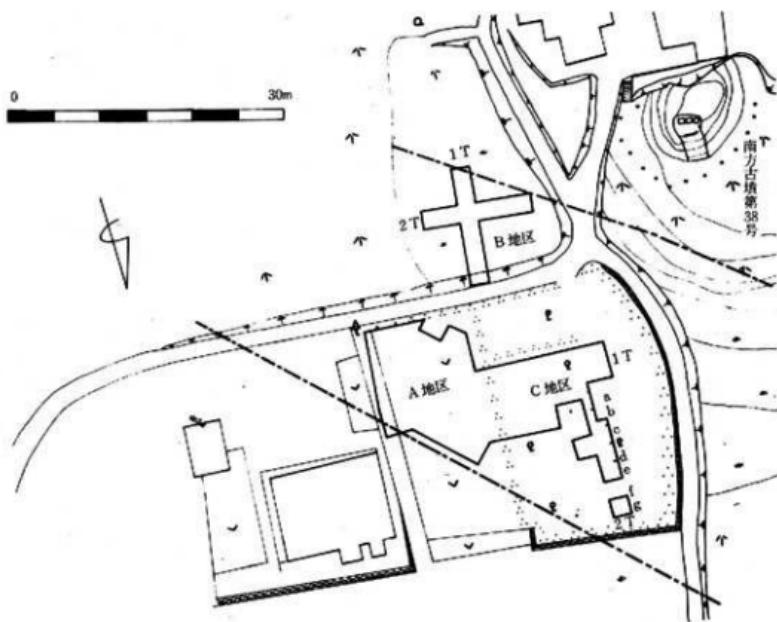
(日高正晴)



第1図 ×点 野田町八田遺跡所在地



第2図 野田町八田遺跡周辺地形図



第3図 野田町八田遺跡平面図

## 第1章

### I. 遺構

本遺跡で確認した遺構は住居跡1と、ピット群、溝状遺構、土器集積塗であった。

以下、項目をたてて、これらについて記すことにする。

#### 1. 住居跡

調査後半になって発見した。今回調査の遺構ではその主な位置を占める遺構と言える。4.5m × 4.6mの隅丸方形であるが、北東隅のみは内側にはいり込み、均整のとれた形状とは言い難い。さらに、南西隅に張り出しを持ち、北西部には一段高く、踏み固めた粘土面が検出された。柱穴は床面に3ヵ所みられた。もう1ヵ所の柱穴は後世のイモツボによって破壊されている。そのほか、住居跡を取りまくように、かなり、多くの柱穴が見い出された。住居跡の掘り込みは第Ⅱ層黒色土から始まり、12~3cmの深さで床面に達した。床面からおよそ30cmを底として柱穴が掘り込まれている。炉はほぼ中央に存在したが、東西90cm、南方60cmの不整形を為していた。炉の上部、底から20cm、地表下60cmのところに小形壺の破片があった。そのほか、住居跡西部から櫛目文上器の上部が出土している。住居内には炭化材が散乱し、焼土がほぼ全面をおおっていた。

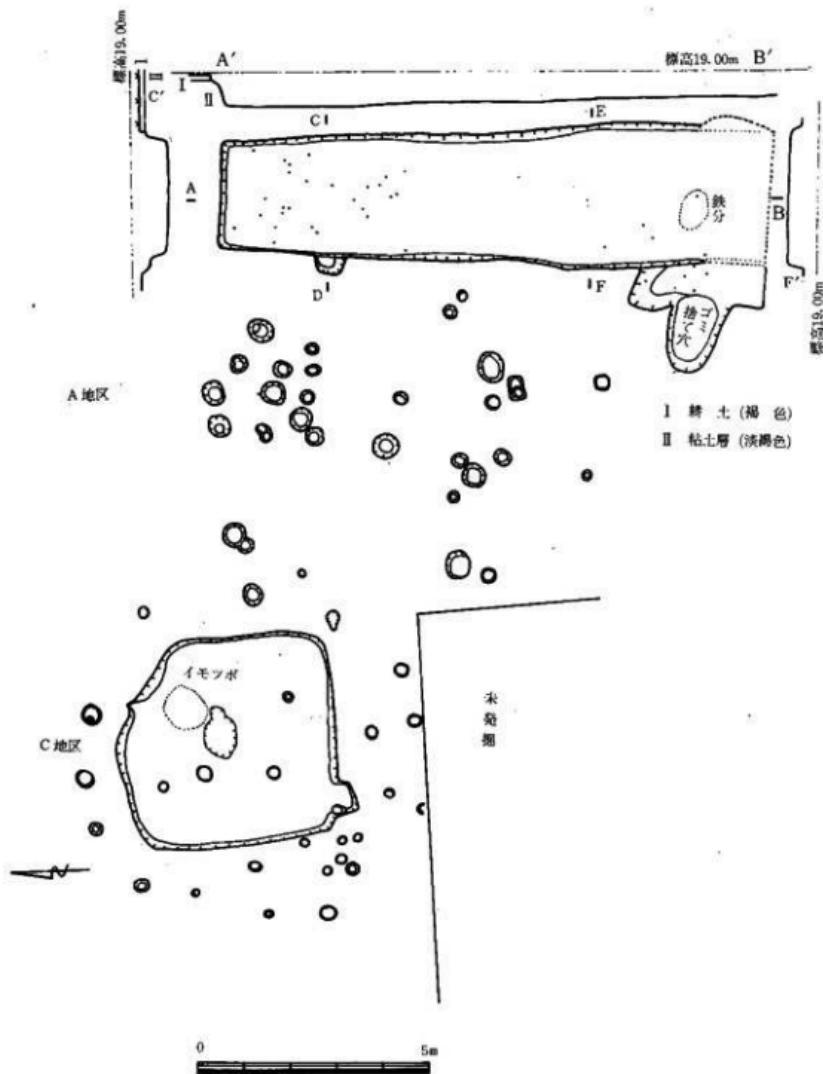
#### 2. 土器集積塗

東西2.3m、南北1.9m程度が、底部で計測できたが、掘り込みの始まりははっきり確認できなかった。地表から底まで約1.2mであった。

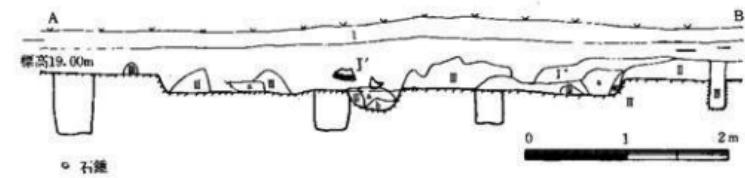
#### 3. ピット群と溝状遺構

A地区にピット群が存在したが、遺物が付近に少なく、はっきり住居跡と同期時のものとは断定できない。また、その東にあった溝状遺構も層位、遺物面ともに同様であった。

(田ノ上哲)



第4図 A地区・C地区・造構実測図

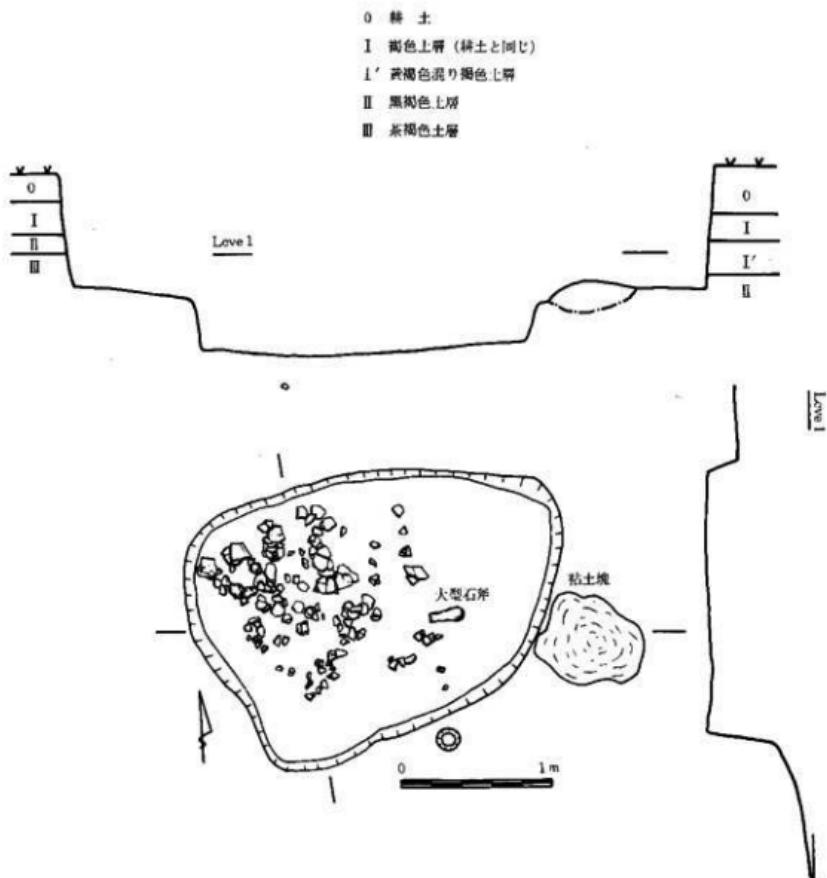


I 耕土(褐色)  
I' 黒褐色土  
II 黑色土  
II' I' + II  
III 黄褐色土(赤ホヤ)

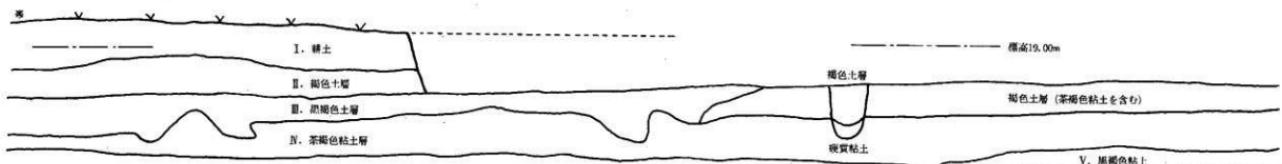
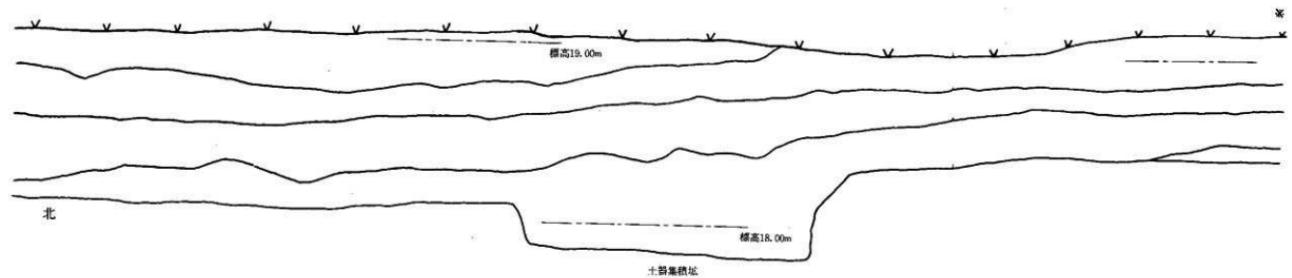
打製石錠

a 焼土  
b 黑色土

第5図 住居跡実測図



第6図 C地区第2トレンチ土器集積地



第7図 C地区第2トレンチ東壁土層図

## II. 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は壺、甕、高杯の土器片と、土錐、石庖丁、石鎌、石斧であった。主として、住居跡付近と土器集積場からの出土で、B地区では土器片が数点しか出土しなかった。

### 1. 弥生式土器（第8図～第10図）

(1)は住居跡内西端から出土したもので、口縁部はく字形に外反した複合口縁を有している。口径は22cmで、頸部最下段の突帯から下部は欠いており、全体の器形は不明であるがおそらく壺形になるであろう。全体にハケ状のもので横位に器面調整を施しているが、頸部下部は斜めに、ややあるいはブラシ状のもので調整している。胎土は砂粒と金色の鉱石を含んでおり、焼成は良好。色調は茶褐色で、口縁上部内外は黒褐色を呈している。内面はやや剥離が見られる。口縁部上半分に4本を単位とした櫛描で波状文を描いているが、その幅は口縁上部の1.5cm下から3.3cm下まで約1.8cm程度である。左か右へ施文しており、46山で器面を一周している。この施文方向と山が右へ傾いていることから考えて、右利きの人が右手で施文したとするのが妥当である。また、頸部最下段、胴部とのつなぎ目に刻みを持った貼り付け突帯がある。刻み目はヘラでかなり深く刻んでおり、上部は左上から右下へかけて下部は左下から右上へかけて、ちょうどくの字になるように刻まれている。この土器はいわゆる安国寺式土器と関連する土器であることは間違いないが、口縁部上半分が外傾しており、安国寺式にみる内傾の状態とはいさか趣きを異にしているといわなければならぬ。

(2)は住居跡の炉上部からの出土で上部を欠いているが、壺形土器であろう。底部は不安定な丸底で、胴上部はラッパ状に外反する傾向がみられる。胎土には石砂粒を含み、焼成は良く全体に淡褐色を呈しているが、二次加熱を受けているためもろくなっている。上部は剥離が進んでいる。器面はヘラ状工具で調整され、内面は粗いハケ調整である。

(3)は住居跡北東隅から出土したもので、割に厚い平底を持つ小型の土器である。胴部は大きくふくらみ、底部内面はほぼ水平に近い状態である。胴部での径は6.8cm、厚さ0.5cm程度で、くびれ部から底部まで3.5cmであるが、上部を欠損している。胎土は石砂粒を多量に含み、全体に白黄色を呈し、非常にもろくなっている。

口縁部は外反するもの(4、6、7、22、24)と、内反するもの(5、8、9、10、23)に分けられる。しかし、資料の総てが破片であり、全体の器形を推測することは困難である。(4)は甕形土器と推定されるが、推定口径23.4cmで胴上部の傾斜は緩やかである。おそらく、胴部の最大凹場は割れ目の少し下部になるのではないだろうか。頸部は内外面ともハケ目による調整が行なわれており、外面にはススが付着し、煮沸に使用されたことを示している。胴部外面にはヘラ調整の痕跡がある。色調は外面赤褐色、内面は暗赤褐色で、胎土には砂粒を混入する。(6)、(7)は殆んど頸部までしか存在しないが、口径はそれぞれ、23.8cmと23.3cmで(4)と大きな差はない。ただ、2点とも(4)の場合より厚手になっていることが相違している。特に(6)は厚さが厚い上に、外面がほぼ直線に近い傾斜を持っていることが特徴である。(22、24)は口径が15.6cm、13.6cmと小型である。ほぼ類似した土器で(24)の胴部の張りから考えて壺形になるのではないかと思われる。(24)は焼成が悪く調整痕も明

瞭ではないが、22は内外面ともハケ調整が為されており、両者ともススが付着している。

口縁部が内反するもののうち、(9)は壺形になると思われる。(10)もほぼ似通った器形を持つであろう。(9)の口縁径は23.0cmで胎土、焼成とも良好な部類である。(5)は前二者と比べると少し起立した感じの頸部を有している。胴部の張り具合はほとんど前二者と変わらない。胎土には砂粒を混入し、もろい焼きである。(8)はこれだけでは器形を推定することはできない。口縁から肩部にかけての線が緩いS字状を呈し、くびれがはっきりしないのが大きな特徴といえる。円周の最大値が胴部に存する土器のようである。23は口径14.5cmで、胎土に砂粒を含まない。淡褐色を示し、もろい焼成である。

24は小さな破片で口径を推定することも不可能だが、輪積の痕を残したものとして取り上げた。輪の一本はおおむね1cmで、この破片では都合5本をつないでいることになる。下部は明確にわからないが、上部は輪の接合面がはずれたような形で割れている。砂粒を含まず、焼成はもろい黄褐色の小型土器である。25は黄褐色の色調を持つ小型壺で、胴下部の厚さが極端に薄くなっているのが特徴的で、或いは底部とのつなぎ面がはずれたのかも知れない。頸部のくびれがはっきり一本の線として残っている。焼成はよくなく、さわるとザラザラして粉末が指につく位である。

これらの土器の底部は平底（11、12、13、14、15、16、17）とあげ底（18、19、20、21）それに18のように丸底に近いものがあげられる。いずれも、頸部と底部の組み合わせが同一土器のものと断定し得る根拠に乏しい。それでここでは個々の特徴のみを記しておく。(11)は器面をヘラ状工具で調整しているが、余り丁寧ではない。砂粒を多く混入し、外面は淡い赤褐色、内面は灰黒色を呈しているが、内面にかなり厚くススが付着している。(12)、(16)は編んだ竹状のものを敷いて成形した痕跡が残っている。(12)は砂粒の混入が少なく焼成もまあまあであるが、(16)はかなり多量に砂粒を含み焼成は悪い。(13)は若干あげ底気味で、砂粒をわずかに含んでいる。焼成は良い方で、ヘラ調整の跡が残っている。(14)、(15)はいずれも黄褐色で砂粒を多量に含み焼成はよくない。(17)は淡い赤褐色で砂粒を混入している。上部の開き方からみて、かなり大きな土器になることが推測される。あげ底を呈するもの4点はいずれもタイプの違うものである。20はむしろ台付土器の脚台として考えた方が良いかも知れない。器面は内外ともにハケ調整の痕跡を残す。砂粒の混入はわずかで、焼成良好うすい赤褐色である。22、23はほぼ似通っているが高さと厚みに差がうかがえる。それぞれ淡褐色赤褐色を呈し、焼成は良く、胎土の砂粒混入は少ない。24の色調は黄褐色で、砂粒混入が多く、焼成は余りよくない。前三者に比べて、低いあげ底を為している。(18)は、底部でも一部の破片であるが、平底というより丸底に近いものと考えられる。器面の色調は淡褐色で、砂粒を含んでおり、焼成はよい。内面にかなり乱暴なヘラ跡が残っている。外面下部にもわずかにヘラ痕が残っている。(19)は小型の壺になると思われるが、内面を残して外面は剥離してしまっており、明確な形状は把えられない。推測が許されれば尖底状の丸底と把握したいところである。砂粒を大量に混入し、焼成は良好な白黄色を呈しているが、一面にひびがはいり、剥離が進んでもろくなっている。

29～32は高杯型土器の脚部である。29は杯の部分と脚部とを別々に製作し、接合した痕跡が明瞭である。胎土は砂粒を含んでいるが、接合後の仕上げには余り砂粒を含まないキメ細かな粘土を用い、ハケ状のもので器面を調整している。下部はヘラ調整らしい。30は32と同タイプになると思う。

ただ、上部が剥離してしまっているので、坏部との接合痕跡は残さない。うすい赤褐色で砂粒を含み焼成はよくない。**⑩**は前二者と比べると大型であるが、接合の痕跡を有している点は同様である。前二者が外反するのに比べて、これは内湾している。砂粒を含む胎土で色調は淡褐色を呈し焼成良好である。器面調整はハケ状のものを用いている。**⑪**は脚の胴付近がふくらむ形であり、脚 자체は直立している。ふくらみの部分は縦に器面調整しているが、上部下部はともに横への調整が行なわれている。この資料は接合部分がわずかに残っていた。表面は淡褐色で、内面は灰黒色を呈し、焼成は良好である。

土鍤は欠けたものを含めると 7 点出土している。ここでは、比較的完形に近いもの 3 点（**33**、**34**、**35**）を掲げた。いずれも大きな砂粒は含んでおらずきめ細かな胎土を用いている。そして、焼成は良いとはいはず、淡褐色乃至、黄褐色を呈している。**⑩**は長さ 3.7cm、最大径 1.5cm、孔の径 0.5cm 程度で、**⑪**はそれぞれ 4.3cm、1.5cm、0.5cm、**⑫**は 3.5cm、1.1cm、0.3cm を計る。**⑬**は高坏の坏部である。**⑯**、**⑰**につくものである。

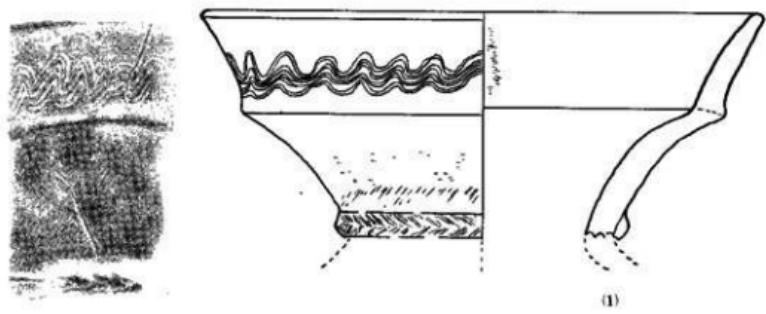
以上、本造跡出土の弥生式土器及び土鍤について記してきた。弥生式土器は器形が単純化し、弥生時代後期の最終段階を示すものといえよう。従って全体として、大分県国東町安国寺遺跡出土の安国寺式と呼ばれる一連の土器との関係が深いことは否めない。壺と壺との区別がつけ難いこともその一つの証左としてあげられよう。ただ、安国寺式土器の特徴の一つとなっているいわゆる櫛目文を文様帶に施文する土器は（1）の資料のみで、他には破片すらも出土しなかったことは判断に苦しむところである。しかも、この土器の口縁部（文様帶）は安国寺式土器のそれが内湾するのとは異なり外へ聞くものであり、他に類例を求め得ない。さらに、胴部以下を欠くため、全体的な器形も推測するしかない。それで、この土器をどのように把え、安国寺系の中に位置づけるかは、今後の課題として残される。

## 2. 繩文式土器（第11図）

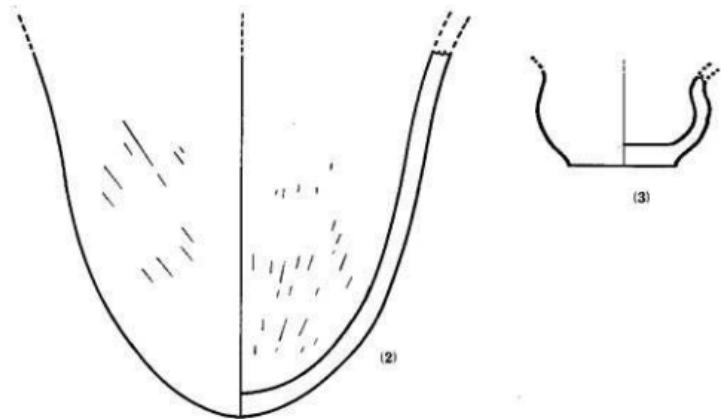
ここに取り上げる土器は弥生式土器の中に混在して出土した遺物である。従って、層位的に弥生式との間に相違があったわけではない。第11図(1)に示す土器は胴部がく字形に曲折する浅鉢形土器である。器面はある程度磨研されている精製土器である。口縁に大きなリボン状の突起を持っている。胎土は細かな砂粒を含み、内外ともに白黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁内部にはヘラ状の施工具で一条の沈線をつけている。晩期Ⅲ式に比定して良いだろう。(2)は上部のみの資料であるが、深鉢として考えたい。器面は貝殻で調整された条痕がみえる。口縁部は外反し、頸部のくびれははっきりしたく字形を呈している。砂粒を混入し、表面は暗褐色だが、二次加熱のため黒っぽくなっている。焼成は良好な方である。(3)も同じく浅鉢形土器である。器形その他は(1)とほとんど変わらない。(4)は内傾する土器で口縁部は貼り付けた刻み突帯を持っている。成形はかなり粗雑で器面調整の方向も一定していない。また裏面は調整の跡がみられない。全体に赤褐色で焼成は良好である。約2cmを一本の幅とする5段の輪積が見られる。(5)は晩期に特有な口縁が内済する深鉢形土器である。口縁部に一条の貼り付け突帯を持つ。器面は浅いヘラ状工具で横位に整形している。胎土には砂粒を含み、外面灰褐色、内面赤褐色の焼成良好な土器である。一面にススが見うけられる。(6)はおそらく波状口縁になるものであろう。上部に貼り付け部を持ち、器面調整は貝殻によっている。貼り付け面はハケ調整である。全体に黒褐色乃至黒色を呈し、焼成は良い。砂粒を多く含み、鉛石の混入もみられる。貼り付けの仕様は雑な感じである。(7)は(4)と殆んど同様の土器である。ただ、刻み目が浅く、(4)ほど粗雑な感じは受けない。(8)は器形の把え方に問題が残るが、おそらく深鉢形土器であろう。(9)は口縁部に突帯を貼り付けした土器できわめて小片のゆえ器形を推測できない。外面は黄褐色、内面は灰褐色である。(10)はある程度研磨された胴部で、貝殻腹縁でもって器面調整している。内外とも灰黒色を呈している。(11)は口縁部でつまみ上げて突帯をつくり出している。胎土には砂、鉛物粒を含み、焼成は良いとはいえない。(12)はわずかにつまみ上げた突帯を持つ口縁部である。粗いハケ目がみられ、黄褐色を呈している。(13)はほぼ(5)に近いタイプの土器である。全体に茶褐色でややススが付着している。焼成は良好な部類で、ヘラで調整している。(14)はつまみ上げた突帯を有する口縁部で、保存状態が悪くもろくなっている。

これらは全て繩文時代晩期の土器である。弥生終末期の土器と混在している点で、解釈に苦しむところである。前述した通り、層位的把握が難しい状態なので、他からの搬入によるものか、最初に晩期の遺跡として存在していたのかは不明である。路線からははずれるが、古墳第38号の西部が本遺跡より一段高い平地になっているので、或いはここからの流入ということも考えられる。

(田ノ上 哲)



(1)

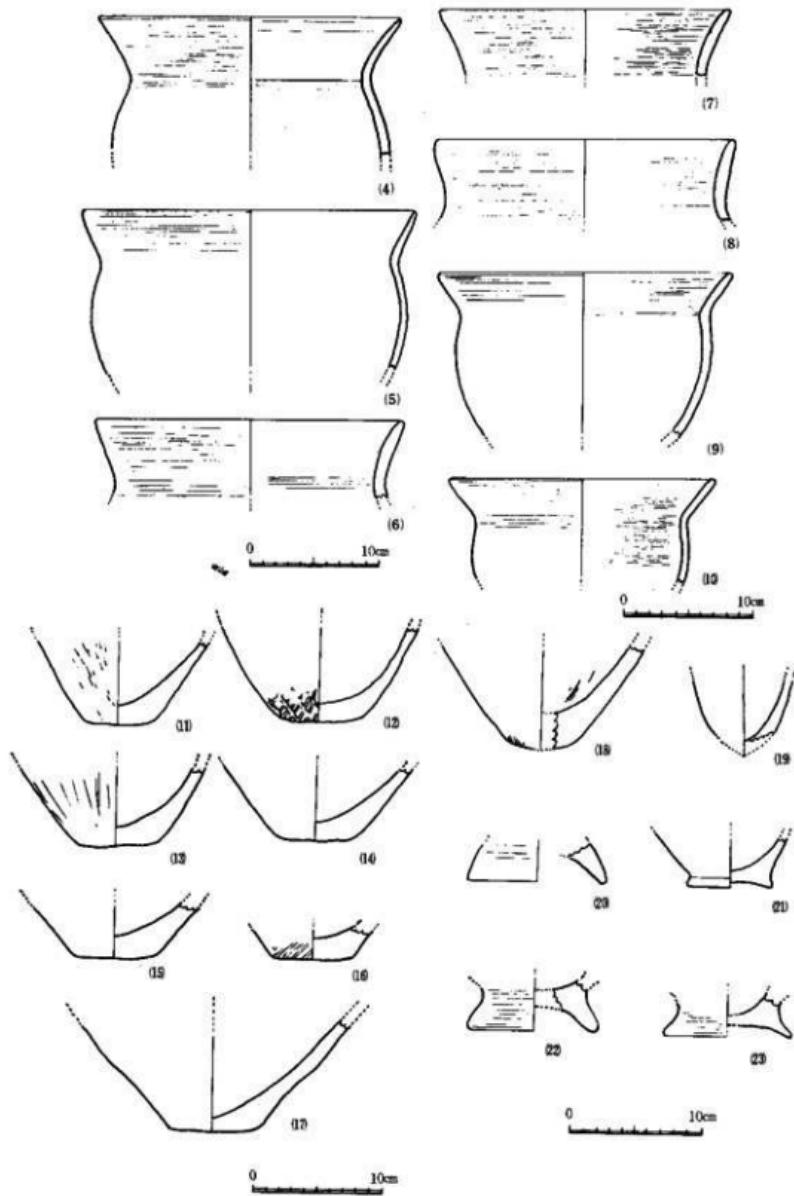


(2)

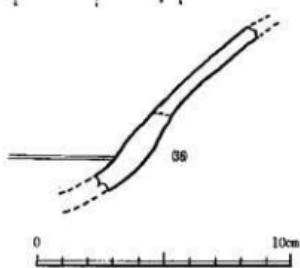
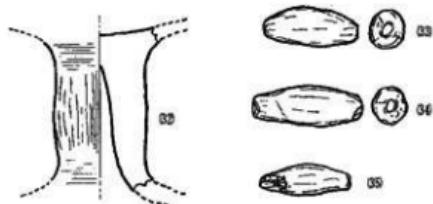
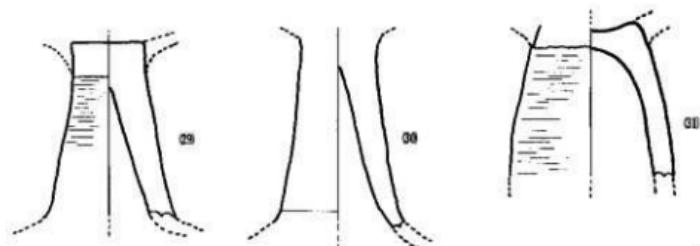
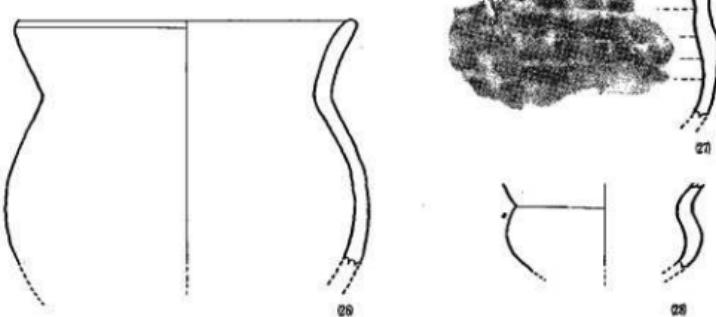
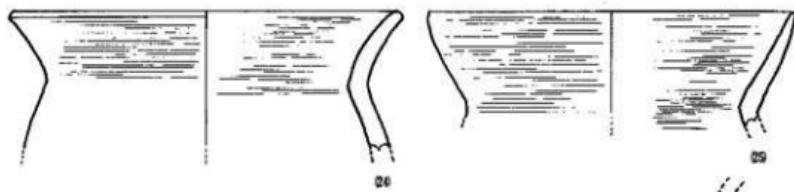
(3)



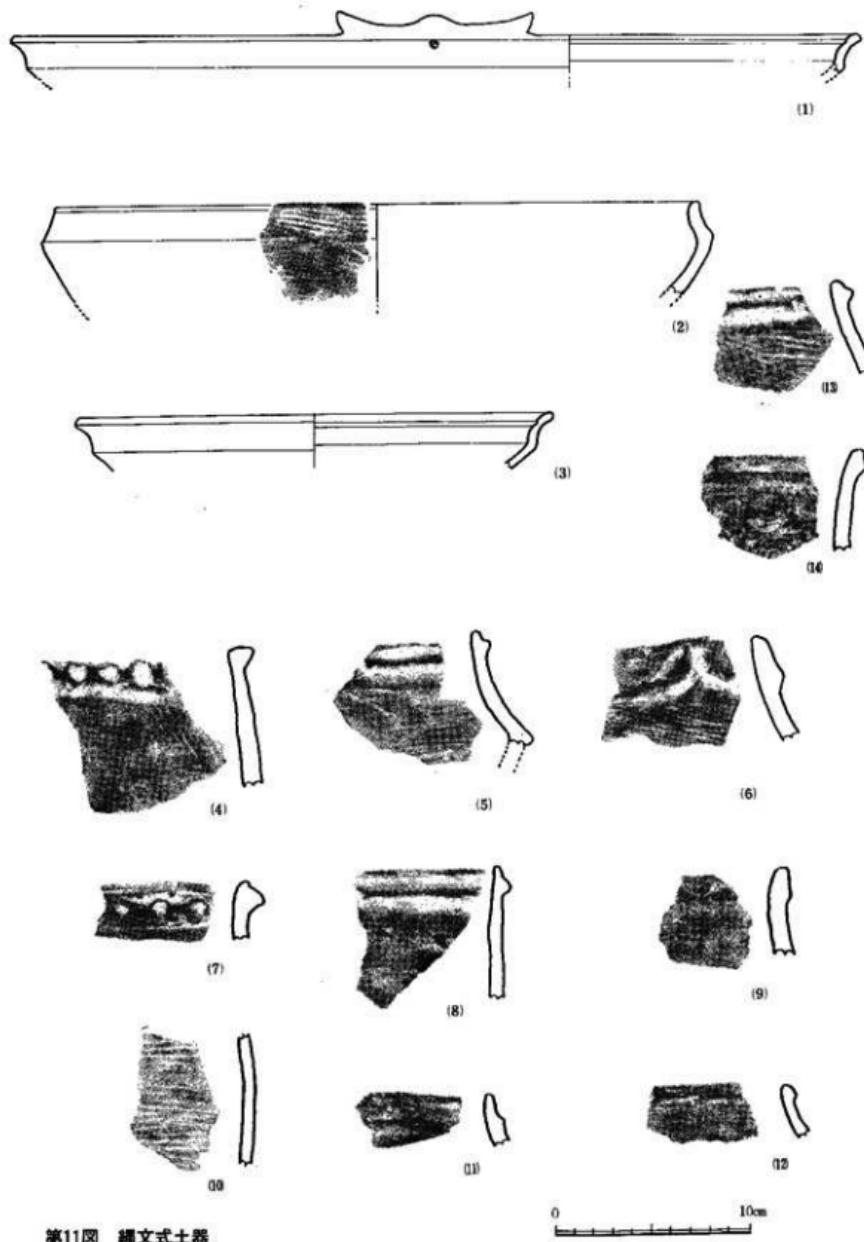
第8図 弥生式土器実測図(1)



第9図 底部(平底)



第10図 弥生式土器(口縁部・胴部・高坏)・土錐



第11図 繩文式土器

### 3. 石器

本遺跡から出土した石器類は、石錘、石庵丁、石鎌、石斧等であった。この内、石錘を除き、他は磨製（半磨製）と打製の2種が認められ、また石庵丁には完形のものもなく、いずれも剥離片ないしは未成品の破片であった。石錘4点、石庵丁片4点、石鎌3点、石斧5点の他、砥石状石器1点、チャート及び頁岩等の剥離片を数点数える。

#### 石錘（第12図 1～4）

合計4点を認めるが、皆自然の河原石の長軸の両端を打ち欠いたものであり、磨製のものはみうけられない。長軸長5cm～7cm、短軸長5cm～6cmを示し、ほぼ画一的な大きさをもつ。また、重量については1が49g、2が52g、3が125g、4が51gを計り、3を除いてほぼ同重量をもつ。石質は、1・3・4が片岩であり、2も変成岩の1種であるには違いなかろうが詳細は不明である。

2を除く他3点は住居跡の周囲1m～2.50mの範囲から出土している。2は住居跡内ではあるが、住居跡床を掘り込んだイモツボから出土しており、明瞭なプランとの関係は認められない。したがって、当住居跡の時期に伴うものであるかは断定出来ない。ともあれ、いずれにしろ単純で素朴な形状をこえない。

#### 石庵丁（第12図 5～8）

合計4点のうち、磨製のものは1点のみである。5・6は上側が面取りしてあるが、刃部に明瞭な調整を認めることが出来ず、未成品とみる。5の剥離はまだ初段階的な工程を踏むにすぎず、6は5より工程的に進み刃部の誕生をわずかにみる。しかし、まだ未成とみるべきであろう。7は打製石庵丁として完成品とみて良いかもしれない。いずれも半月形を成すと考えられる。8は剥離片であり、既形の面影を残すのは、磨製の施された片面のみである。また、明瞭ではないが、穿孔された小孔を認める。石質は頁岩が多いが、5は千枚岩、6は頁岩と砂岩の縞状スレートである。

8は住居跡内から出土している。

#### 石鎌（第12図 10～12）

3点の内、磨製石鎌は1点のみで、すべて無茎石鎌である。10は全長4cm、最大幅2cmを計ると思われる磨製石鎌である。三角形の底辺がわずかにくぼむ凹基式を成すと思われる。1mm～3mm幅で両側に刃部の鏽をもつ。11は全長4cm、最大幅3cmを計ると思われる、わりに大型の打製石鎌である。いわゆるわたりくりをもつ、凹基式である。12も形状的には11に共通するものであるが、全長3cm、最大幅1.7cmと底辺がすばまり、三角形の頂角が鋭角を示す。石質は、10が頁岩である他、11はチャート、12も同じくチャート質のものとみておく。

11は住居跡の壁際から出土している。

### 石斧（第13図 1～5）

半磨製もの2点と打製のもの4点の合計6点である。1は全長22cm、最大幅9cm、最小幅5.5cmを計る大型石斧である。石斧としてより、土掘具としての役割をもつとも思われる。周囲に細かい剥離調整が施してあるが、刃部が磨滅し切っており、しかも土器集積場の底から検出をみていることなどから、使用後廃棄されたものと考えられる。楔形とみなせる。2は半磨製の石斧であるが、先端部を欠いている。短冊形である。3も短冊形を成すと思われるが、やはり先端部を欠いている偏平な断面を示し、両側をかなり細かく打ち欠いていることから、石庖丁として供された可能性を持つと考えられる。石質は頁岩であり、石庖丁に用いられた石質とも共通する。4は分銅形に近くくびれをもつと思われるが、およそその部分から折れたものである。入念な剥離の調整は認められない。5は半磨製の短冊形を成す小型石斧である。全長7.3cm・最大幅2.8cmを計る。両側の片側は研磨されているが、他方は打ち欠かれたままの状態を成す。さらに、両面に研磨の跡を認めるが、さほど精良とは思えない。石質は1・4が片岩、2・5が砂岩である。

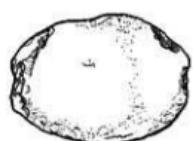
4が住居跡内から出土している他、5が1と同じく土器集積場から出土している。

他、砂岩を用いた砥石状石器（第12図9）をみると、後は剥離片数点を認めるにすぎない。

以上各々の石器類を今回検出された住居跡に伴うものとみれば、本遺跡における（地域性）というものが問題とされてこようと思う。出土石器類から各々農耕・魚労・狩猟の生産形態を想起することが出来、立地的にも間近かに河川をもち、耕作に共せられる一程程度の平地を眼前にし、狩猟を可能とする山地を背後にひかえている。それは、生産構造からいって比較的バランスのとれたものと考えられるが、ともあれ本遺跡周辺における類例が待たれる。

なお、石器類の石質については、宮崎県総合博物館、宮脇繁氏の御教示をえた。

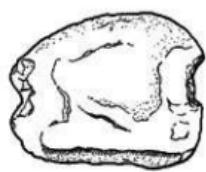
(北郷泰道)



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(11)

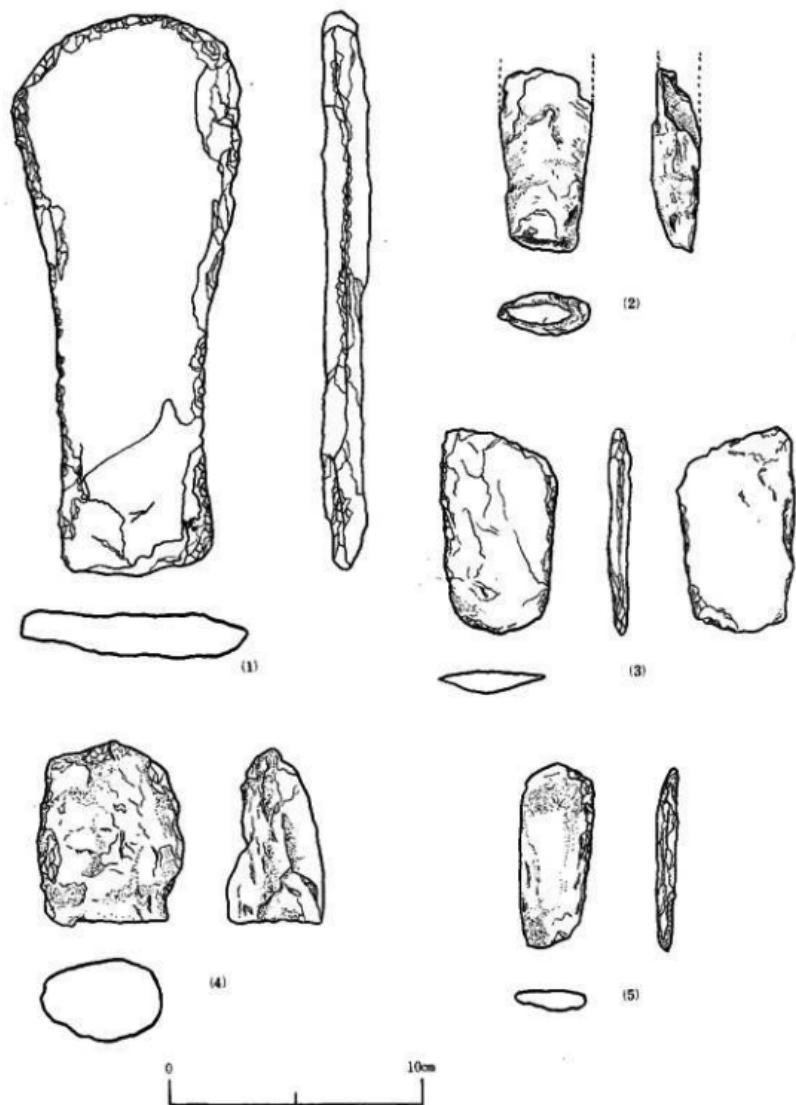


(12)



(1) 石片  
 (2) 石核  
 (3) 石核  
 (4) 石核  
 (5) 石片  
 (6) 石核  
 (7) 石核  
 (8) 石核  
 (9) 石核  
 (10) 石核  
 (11) 石核  
 (12) 石核

第12圖 石器實測圖



第13図 石器実測図(2)

#### 4. 住居跡木材炭化物

(イ) 住居跡には、小屋組に使用されたと考えられる、完全に炭化した木材が、柱孔近くに散在していた。住居跡の床面上約15cmの部分より出土した、直径約3cmの木材炭化物（樹種はシイノキ）には、繊維にはゞ直角に樹心に向って、直徑約0.7cm、深さ約1.2cm（出土時の測定）の、ほゞ正円の小孔が存在した。落枝跡（節孔）ならば、節周辺の繊維の乱れ（繊維の湾曲）が見られるが、本資料には繊維の乱れはなく、繊維は直角に切断されている。穿孔方向、使用目的は全く不明であるが、人為的に穿孔されたものと考えられる。

穿孔とほゞ同一直径で、穿孔内に丁度入るような、円柱の炭化物が、穿孔されていた木材炭化物（シイノキ）の、すぐ横から発見された。しかし、横断面での木材細胞の配列、又は繊維質のものは観察されず、非常につぶれ易く、詳細な観察は、不可能であった。シイノキ、カシノキなどの種子とも考えられるが、不明である。

(ロ) 木材炭化物の樹種、木材炭化物が散在していた8カ所から、13個体の資料を採集し、樹種の鑑定を行った結果、次の7種を認めた。（うち一種は樹種不明）

シイノキ (*Castanopsis Cuspidata Schottky*) 2個体、カシ類 (*Cyclobalanopsis Oerst*) 一種名は不明—3個体、ツバキ (*Camellia japonica L.*) 1個体、モッコク (*Ternstroemia japonica Thunb.*) 3個体、シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum Thunb.*) 1個体、樹種不明の広葉樹（散孔材）2個体、竹類（竹種は不明）—ごく小片—1個体

出土した木材炭化物は、すべて常緑広葉樹であって、現在の一般用材であるスギ、ヒノキ、マツなどの、針葉樹が見出されなかったことは、大萩遺跡（宮崎県教育委員会 1975）での調査結果と同様である。常緑広葉樹林内に生育する、比重、硬度ともに中庸で、使用するのに適当な広葉樹を伐採し、生活用資材としたのであろう。特に竹材の炭化物が木材の炭化物と共に出土したことは、当時の生活資材として、竹材も盛んに利用されたと推察される。竹材遺物の出土は非常にまれであり、今回の竹材炭化物の出土は、大変珍しいものである。

（大塚 誠）



上面

× 2



侧面

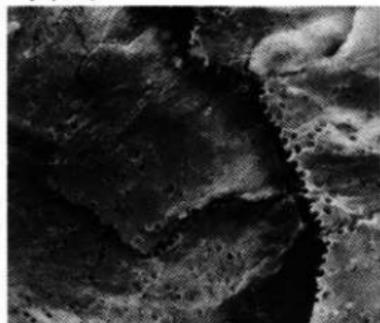
× 2



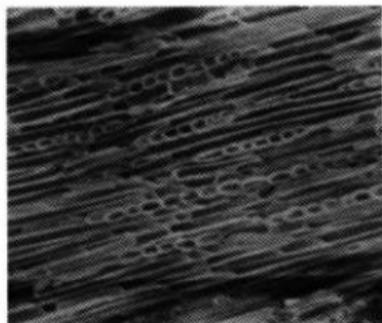
円柱状炭化物 ×1.5

## 木材炭化物

シイノキ

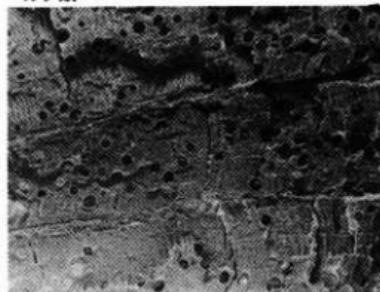


横断面（木口面） ×30

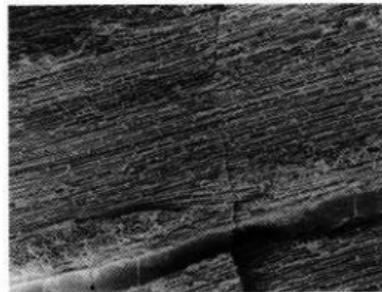


接線断面（板目面） ×400

カシ類



横断面（木口面） ×50

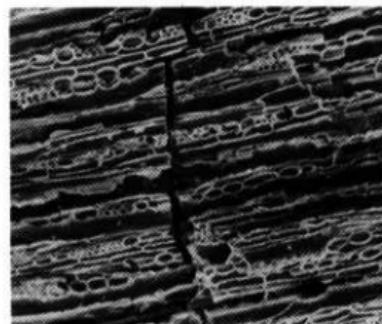


接線断面（板目面） ×100

ツバキ

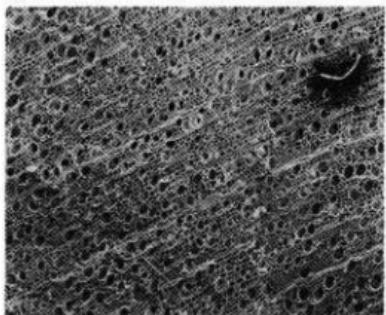


横断面（木口面） ×100

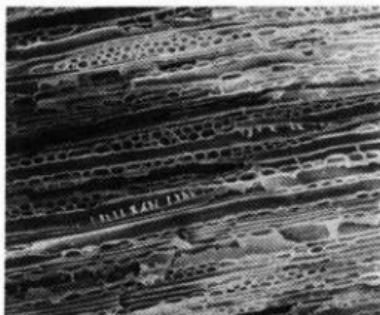


接線断面（板目面） ×200

モッコク

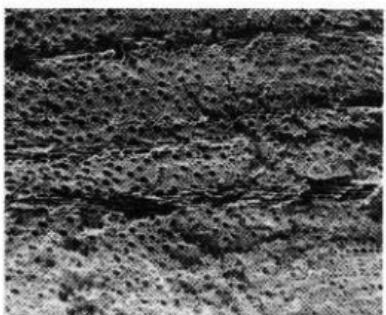


横断面（木口面） ×100

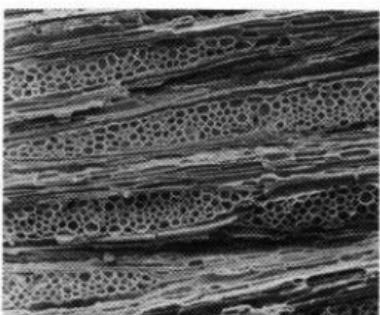


接縫断面（板目面） ×200

シャシャンボ

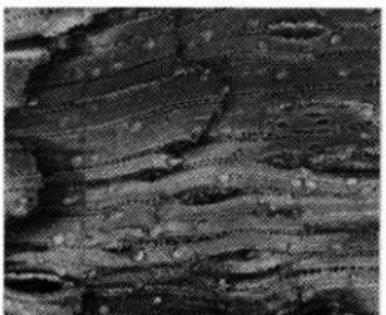


横断面（木口面） ×100



接縫断面（板目面） ×200

樹種不明

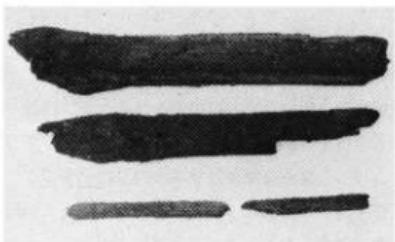


横断面（木口面） ×50



接縫断面（板目面） ×100

竹材



×1.5

竹



横断面

×100

## 第2章

### 結語

野田町八田遺跡は五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれ、古代住居には最適の場所に位置し、しかも、この台地の周辺一帯は水田耕作には絶好の地形であったと推察される。この遺跡からは宮崎県の平野部に一般的に認められる広口の外反り口縁の壺や平底の土器片などが数多く出土し、また、東九州地帯に濃厚に分布するくの字型2重口縁の土器片などが出土した。これらの出土遺物などから考察して、この遺跡の年代を弥生式後期に比定したい。このような弥生式後期の遺跡は延岡以南、川南町高鍋町、西都市、宮崎平野など宮崎県の中部平野を中心にして認められる。また、この遺跡から発見された、多少、不整形ではあるが角丸方形の住居跡には内部に4個の柱穴が掘り込まれ、さらにこれを取りまくように10数個の柱穴が確認された。この柱穴の相互関係から当時の建築様式を想定できるのであるが、この住居跡とほぼ同一形式のものが、市内貝の畑遺跡(1)の発掘調査の際にも発見された。貝の畑の場合はやや長方形を呈しているが、柱穴はこの遺跡と同様、内部に4個とこれを取りまくように柱穴が掘り込まれていた。また、昭和41年7月、県教育委員会主催による高鍋町持田の弥生式遺跡(2)の発掘調査においても、同様、長方形ではあるが、野田町八田遺跡の住居跡と殆ど同一造構のものが発見された。これらのことから考えられることは宮崎県の平野部一帯に見られる弥生式時代後期の角丸方形住居跡を一つの形式として想定してもよいと思う。しかし、同じ平野部に見られた住居跡でも、川南町把言田遺跡(3)や西諸県郡野尻町の大荻遺跡(4)などに見られる不整形で造り出しなどを有する方形状の住居跡は極めて地域性を有するものとして考える必要がある。何れにしても、一応、区分できる兩様式の住居跡がすべて弥生式後期の遺跡に共存することは古代日本における弥生式文化を考察してゆく上に貴重な資料を提供したものとして高く評価したい。

- (1) 第二次日向遺跡総合調査第2・3輯 (宮崎県教育委員会)
- (2) 同 上
- (3) 宮崎県文化財調査報告書 第3輯 (宮崎県教育委員会)
- (4) 大荻遺跡 (1) (宮崎県教育委員会)

(日高正晴)

図 版

図版 1



八田遺跡遠影（北西 五ヶ瀬川堤防から）矢印—遺跡



調査前の状態（北東から）矢印—南方古墳第38号

図版 2



C区の調査状況



住居跡炉上部の変形土器

図版 3



住居跡（北東から）

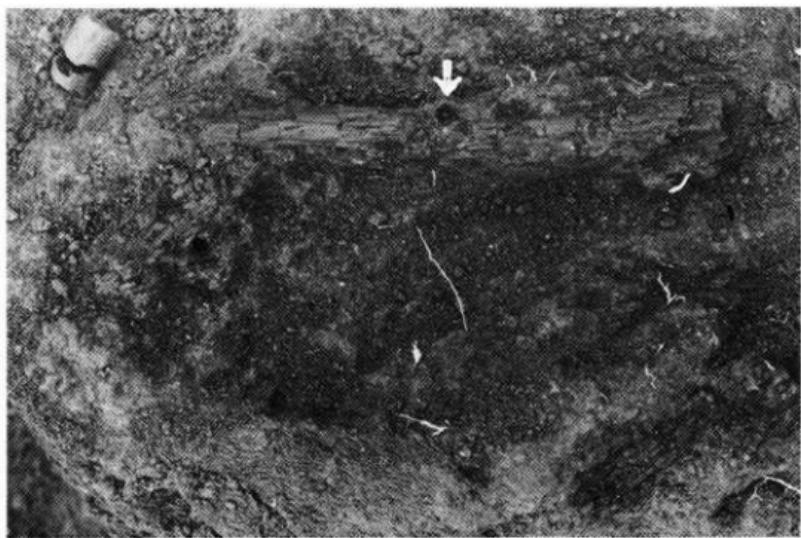


溝状遺構（南から）

図版 4



住居跡出土の横目文土器



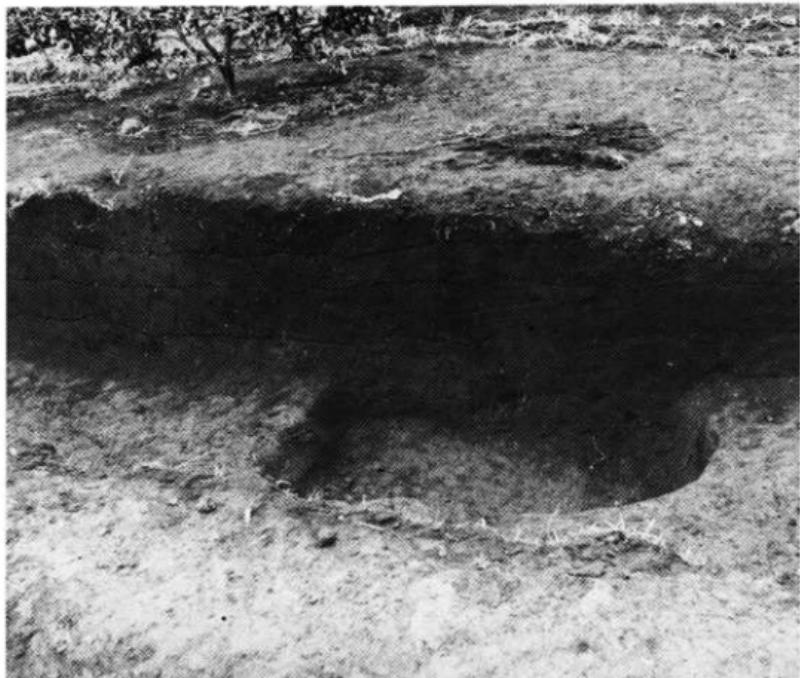
孔のある炭化木材（矢印）

図版 5



C地区土器集積塗上面(上)・底面(下)

図版 6



C地区第2トレンチ東壁土層・土器集積堆



柳目文土器・壺形土器・小型土器

圖版 8



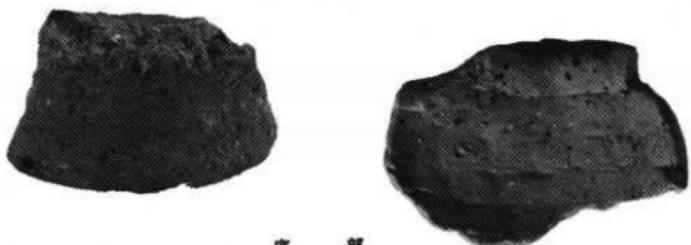
出 土 土 器

図版 9



出土土器底部

圖版 10



底 部



高 坯 脚 部



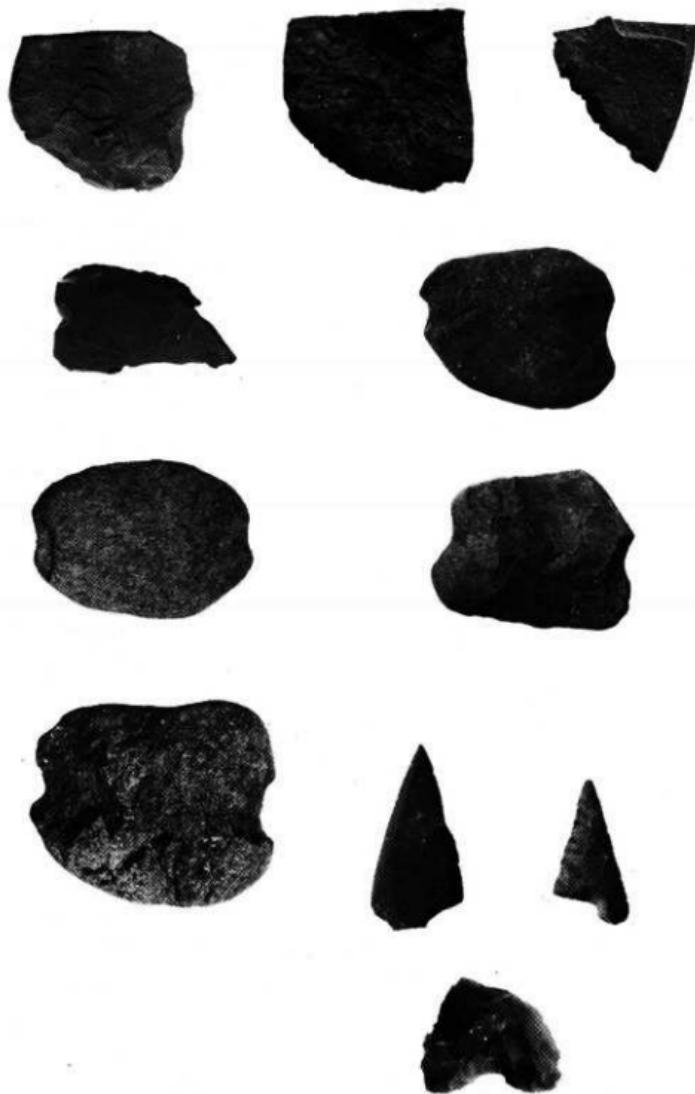
土 锤

図版 11



出土縄文式土器

図版 12



石庵丁・石錐・石鎌

圖版 13



石 斧

野田町八田遺跡

昭和53年3月31日発行

編集・発行 延岡市教育委員会

印 刷 明巧堂印刷株式会社

延岡市大賀町3丁目1272

TEL 33-6327